

瑩山禅師と仏教教理史的背景：「身心脱落」をめぐって

著者	中田 直道
雑誌名	鶴見大学佛教文化研究所紀要
号	1
ページ	139-151
発行年	1996-03
URL	http://doi.org/10.24791/00000557



瑩山禪師と仏教教理史的背景

—「身心脱落」をめぐる—

中 田 直 道

道元禪師の「身心脱落」という言葉について瑩山禪師・明峰素哲禪師・大智禪師が解釈を示して居ることが東隆眞博士により報じられている。「太祖瑩山禪師（四六）—瑩山禪師と永平『正法眼蔵』—『跳龍』四七三号昭和六十三年十一月号大本山総持寺出版部発行）」

『大智度論』に精進（行動のもと）との関連で、「心息無為」とあるが、これを「心の分別が止み、精進がもとである行為も無くなる。」と筆者は解した。「大智度論における精進の一樣相」『鶴見大学紀要』第32号・第4部 人文・社会・自然科学編（平成7年3月pp. 199—pp. 209特にpp. 206—209）」

これは、『大智度論』で次のように述べているからである。

「仏の所説の如くんば、爾の時菩薩の精進は身《精進》（cf. *kayika*…*virya*）を見ず、心《精進》（cf. *Caitasikavirya*）《*Pancavimsaip. p. , p. 26, 1. 8*》を見ず。身に作す所無く心に念う所無し。心身一等にして分別無し。求むる所は仏道を以て衆生を度する（なるも）衆生を此岸と為し仏道を彼岸とするを見ず。一切の身心の所作を放捨すること《あたかも》夢に為す所は覚めて（みるに）作されたること（所作）無きが如し。是れは寂滅と名づく。諸の精進は故に《此の意味に於て》波羅蜜と名づく。

ゆえはいかに。

一切精進は皆邪偽なるが故なり。一切作法《行為に関する法》は皆虚妄不実なるを以てなり。夢の如く幻の如し。諸法平等は是れを真実と為す。平等法にあたりてはまさに、求索する所有るべからず。是の故に一切精進は皆虚妄なるを知る。

《諸精進が波羅蜜といわれるゆえんについて》

「精進は虚妄なりと知ると雖も、而も常に成就して退せず。是れを菩薩の真実の精進と名づく。」

以上の『大智度論』中の精進関係での記述は身心脱落に対応するものである。

この箇所的位置する所は毘梨耶波羅蜜義第二十六（大正第二十五卷・一七二頁a以下。身心精進不懈怠故。…摩訶般若波羅蜜經・大正八卷二一九頁a—二行）を引用してはじまる。怠は大智度論では息・同第二十七（大正第二十五卷・一七四頁a—一八〇頁b）で構成する部分の終りの方である。「筆者が仮に設けた科段では八に属す」。

大体をみると、構成は次のようである。

一、精進波羅蜜が六波羅蜜中でしめる意味や位置。特に禅定との関係に多くのスペースを割いている。（大正第二十五卷一七二頁a—c十行目まで。）

二、精進の利益（op. cit. p. 172, c, l. 10—p. 174, a, l. 7）

三、精進の相。

（A）善法中の精進の相。（op. cit. p. 174, a, l. 1—b, l. 4）五事すなわち手脚の四と頸頭の部分の計五部分の動作（＝事kriya）について言われ得ることで、「事に於て必らず能く起発して難き無く、志意堅強にして心に疲倦無く、作す所を究意す。此の五事を以て精進の相と為す。」にはじまる諸相がのべられる。胴体は事がない。理想的境地に

入った時、体の六肢が不動で心も寂靜になるという法華経化城喻品中で動かなくなった部分の第一として胴体 (antara = <antarādhī>) があげられるが、胴体は動かぬものと扱われるので、不動になった六肢の第一にあげられることになったと思われる。それと同じ道理がここ大智度論でもみられるのである。 (胴体の不動については、拙論「若干の初期大乘經典とアーユルヴェーダ―病理的要素と六肢とをめぐって―」『高崎直道博士還暦記念論集』東京昭和六十二年十月春秋社刊 pp. 183—199. 特に pp. 183—191)

(B) 善法精進と精進波羅蜜との違い。(大正第二十五卷 p. 174, b, 1. 4—p. 174, c, 1. 3)

(C) 菩薩の精進波羅蜜 (op. cit. p. 174, c, 1. 3—p. 174, c, 1. 6). 五項目にわけてみる。

第一項、世間の人・声聞・辟支仏には諸波羅蜜がみち備わることがない。(菩薩の精進波羅蜜が他の波羅蜜と兼修されることは五 <op. cit. p. 177, c, 1. 10—p. 178, a, 1. 4> のようにされる。菩薩は精進して、他の五つの波羅蜜を普ねく行^スじ^ルが、[＊]「新行の若^クき菩薩」は則ち一世一時に遍ねく五波羅蜜を行^スじ^ルことができな^ラず七 (op. cit. p. 179, b, 1. 9—c, 1. 3) のようにされる。＊(cf. pañcaviṃśatisāhasrikā prajñāpāramitā ed. by N. Dutt, London 1934 Luzac & Co. p. 19, ll, 7—11 ; p. 26, l. 10—p. 27, l. 3 viz. …evam bodhisattvena mahāsattvena dānani dadatā sat pāramitāḥ paripūrītā bhavanti | evam śīlapāramitāyām sarvāḥ sat pāramitāḥ paripūryante | evam kṣāntipāramitāyām sarvāḥ sat pāramitāḥ paripūryante evam vīryapāramitāyām sarvāḥ…evam dhyānapāramitāyām sarvāḥ…evam prajñāpāramitāyām sarvāḥ… || iti jñānasahagato madhurasanigiti bhāṣopamaḥ || 凡^ソの^レの^レの^レ菩薩摩訶薩は布施を与えて六波羅蜜を満たす。このように戒波羅蜜において六波羅蜜のすべてが満ちる。このように、忍辱波羅蜜において六波羅蜜のすべてが満ちる。このようにして精進波羅蜜においてすべての……。このようにして禅定波羅蜜においてすべての……。このようにして般若波羅蜜多においてすべての……。凡^ソの^レの^レの^レの^レ jñānasahagato

第二項、是の人(第一項にいわれた人)は大慈大悲がなく、衆生を棄捨し、十力・四無所畏・十八不共法・一切智及び無礙解脱・無量身・無量光明・無量音声・無量の持戒と禪定と智慧とを求めない人であるから、是の人の精進は波羅蜜とは名づけけない。

第三項、菩薩の精進というものは休まず息まず、一心に仏道を求めるものであり、このような行を精進波羅蜜と名づける。

第四項、衆藥和合して重病を治するように精進力をはじめとして五波羅蜜を行じるのを菩薩の精進波羅蜜とする。

第五項、現世的利益、一身の利益の為や生天・転輪王・梵釈天王を得んが為に菩薩の精進があるのではない。また精進によって自らの為に涅槃を求めようとするのではなく、仏道によって衆生を利益せんが為である。このような特色(相)があるのが菩薩の精進波羅蜜である。

四、慈・悲と実相の智慧と菩薩の精進 (op. cit. p. 174, c, 1. 6.—p. 177, c, 1. 10)

(A)菩薩の精進は大悲を首とし慈を主とする。

(B)菩薩の精進は実相の智慧を首として六波羅蜜を行じるものである。これを菩薩の精進波羅蜜という。

(C)〔論難〕 質問者が(B)について次のようにいう。諸法の実相は無為無作である。精進は有為有作の相をもっている。有為有作の精進が無為無作の実相を首として六波羅蜜を行じることができようかと。肉体的行動・行為のもとである精進が、行為動作が止んでいることを特質とする実相の智慧を頭に戴いて (sīrasā kṛtvā?) いて六波羅蜜をどうして行じ得ようかというのであろう。(op. cit. p. 174, c, 1. 1—p. 175, a, 1. 1) 精進には身心的 (kāyika) と心的 (cāntasika) の二つがある。肉体的行為(五事)としての一般的精進の相は三のAでのべられている。(上述の通り)。

また、二のところでは、精進は一切の行為のもとと考えられている。すなわち、次のようにのべているからである。「復次に一切の衆事（事^{*1} || kriyā はたらき）は、若し精進無ければ則ち成じる能わず。譬えば下薬は巴豆を以て主と為すが如し。若し巴豆を除けば則ち下力無し。是くの如く意止・神足・根^{*3}・力・覚・道は必ず精進を待つ。若し精進無ければ則ち衆事弁ぜず。戒の如きは唯八道にありて余処に在らず。信は根・力に在れども余処には則ち無し。精進の如きは、処として有らざる無し。既に衆法を総べて別に自ずから門有り。例えば無明使は一切諸使の中に偏在するも而も別して不共の無明有るが如し。」（op. cit. p. 173all. 11—17.）

*1 事 || kriyā 〈MAV. 真〉 〈Lank. 宋魏〉（中村元博士「佛教語大辞典」上、p. 565 [4]）
kriyā || 事・作事・所作事（荻原雲来博士「梵和大辞典」）

*2 下薬 『大智度論』卷第十五大正二十五p. 173al. 12.

cf. 即以三種種諸下薬草一熏^二青蓮華^一。『大智度論』卷第十六） op. cit. p. 179c. 1. 14.

*3 根は能力、力はそれに対し実際にはたらく具体力となったものという。水野弘元博士「仏教要語の基礎知識」
春秋社1972刊p. 192

根と力と精進の関係については、左を参照すべきである。

「五根中に於いて精進根と名づけ、根の増長するを精進力と名づく」（『大智度論』卷第十六、大正二十五p. 174b.）

根（力）と精進が並び挙げられる例

indriya-vīrya-vaimātrātām (W. T. SP. XV. p. 270, 1. 11. See foot note 3.)

(indriyabalavīryavaimātrātām-) (Toda SP. XVI) (Tathāgatāyuspramāṇaparivarta)

p. 155, 306a (317. 13-318. 4)

indriyaparārajñātām viryābhdhi-mātratām (NK. SP. XV. p. 317, 1. 14.)

其諸根利鈍。(羅什訳『妙法蓮華經』如來壽量品、第十六大正九、p. 42c.)

cf. vaimātra (various. see Edgerton BHSD.)

indriyaviryaparāparavaimātratām

(NK. SP. V. p. 123, 1. 7; WT. SP. V. p. 115, 1. 23.)

indriyabalaviryavaimātratām (Toda SP. 124a<123. 2—123•8> p. 63) (觀是衆生)

諸根利鈍。精進懈怠。(隨其所堪)(羅什訳『妙法蓮華經』藥草喻品第五、大正九、p. 19b.)

ヴェーダ文献に見られる根と精進については

Arion Roşu : Vēd. indriyam vīryam (Mitteilungen des Instituts für Orientforschung, Herausgegeben im Auftrag des Kuratoriums des Instituts von Fritz Hintze, Band VII. 1959, 60, Akademie-Verlag • Berlin 1960, S. 194-197)

古ラテン語の薬の理論では基本的な概念があげられ、そのなかで rasa(味)、rasa vipāka・vīrya・prabhāva などがある。(cf. G. Jan Meulenbeld : Reflections on the basic concepts of Indian pharmacology, Studies on Indian Medical History edited by G. Jan Meulenbeld and Dominik Wujastik, Egbert Forsten, Groningen 1987, Chapter 1 pp. 1-17.)

精進 vīrya については、チャカラ本集では広義では薬物の働きのすべては vīrya によりもたらされることが紹介される。(op. cit. p. 11, ll. 5ff. from bottom.vīryam tu kriyate yena yā kriyā | nāvīryam kurute kinīcit

sarvā viryakṛtā kriyā || Ca Su. xxvi. 64-65.)

Meulenbeld の右の論文と Roṣu の右論文とは Prof. Dr. R. P. Das からコピーをいただいた。

身体的精進については更に六で述べられている。ここではのべず後に触れる。

四(C)「答えその一」

「答へて曰く。諸法の実相は無為無作たることを知ると雖も、本願の大悲を以て衆生を度せんと欲するが故に、無作に
中りては精進力を以て一切を度脱す。」(op. cit. p. 175, a, II. 1-4) (於)

この答は、本論文はじめの方で紹介した智度論卷第十六末科段八での所論に対応するものと筆者は考える。諸法実相の無為・無作の境を体験し、その体験をふりかえり反省し、「知って」、「本願の大悲を以て衆生を度せんと欲し…無作に中りては《還りて菩薩の法を行じ諸の功德を集め…卷十六の末科段で八より補足》精進力を以て一切を度脱す」と補って考える。有為(としての虚誑)の精進から諸法平等の境地へ、さらにそこから(菩薩の位に還って菩薩の真実精進を行うのですなわち)、「精進力を以て一切を度脱す」るのであるから、同一時期に、有為と無為とが同一人の上にかかるものではなく、矛盾があるものではない。

四(C)「答えその二」

「復次に、若し諸法の実相は、無為無作にして涅槃の相の如くならんには、一無く二無し。汝云何んぞ実相は精進の相と異なると言ふや。汝はすなはち、諸法の相を解せず。」(op. cit. p. 175, II. 4-6)

この箇所は智度論卷第三十二の次の箇所を参照して理解することにする。以下に紹介するこの卷第三十二の箇所は科段四C「答えその一」科段八に対応することが認められるのみならず、また、四C「答えその二」の諸法実相を「涅槃の相の如くならんには」と説くのによく対応し、詳細な説明を伴っている。「答えその一」に対応する箇所で

は三段にわけている。即ち(1)諸法実相を知っても、その時證しても(2)「仏道を成ずるを妨げ」(3)「菩薩は大悲と精進力を以ての故に還りて諸行を修す」と。四C「答えその一」よりも一段説明がふえている。諸法実相について加藤純章博士「大智度論の世界」(講座大乘仏教2、春秋社昭和58年刊)中の般若波羅蜜と諸法実相なる研究がある。そこで今次に紹介する資料があげられている。(同書百九十頁註22)。

氏の諸法実相の解釈に従って、解していく。

「若しくは菩薩是の法性(『諸法実相』)中に入り、はるかに實際『諸法実相』を知るも若しくは未だ六波羅蜜を具足『満足』せずして衆生を教化するも爾の時若し證すれども佛道を成ずるを妨げ、是の時菩薩は大悲と精進力を以ての故に還りて諸行を修す。『證は此の段の終りに近い所で、「若し證を得る時は、如・法性則ち是れ實際なり」とあるのを参照して解する。』」

つづいていう所は、今問題にしている文四C「答えその二」の、「諸法実相は無為無作にして涅槃の相の如くならんには…」を解する資けとなるので以下に紹介する。諸法実相と涅槃の相との関係を詳述しているからである。

「復次に、諸法実相に中りては常なる法の有ること無く、樂なる法の有ること無く、我なる法の有ること無く、実なる法の有ること無し。また是の觀法をも捨つ。かくの如き等の一切の觀法は皆滅す。是れを諸法實(相)にして涅槃の如く不生・不滅にして本より未だ生ぜざるが如しと爲す。譬へば水は冷相にして火を假るが故に熱く、若し火滅すれば熱盡きて還りて冷きこと本の如くなるが如し。諸の觀法を用いるは水の火を得るが如く、若し諸の觀法を滅すれば火滅して水の冷やかなるが如し。是れを名づけて如にして實の如く常住すと爲す。(是名爲「如實常住」)《国訳一切經での讀みに従がう。》何を以ての故に諸法の性自ずから爾るや。譬ふるに、一切の色法は皆空分有るが如く、諸法中に皆涅槃性有り。是れを法性と名づく。涅槃の種々の方便の法中には皆涅槃性有るを得。若し證を得る時は如

と法性とは則ち是れ實際なり。《cf. 「是三へ如・法性・實際」皆是諸法実相異名」大智度論卷三十二、大正第二十五p. 297c. 1. 16. 加藤論文op. cit. p. 177, 1.-3参照》。復た次に「法性とは無量無辺にして、心・心数法の量る所に非ず。是を法性と名づく。妙此に極まらんには是れを眞際と名づく。」(大智度論卷三十二、大正二十五p. 299, a. 11. 7-21.) 諸法実相と如涅槃相と(こころ)。cf. op. cit. p. 190, b. 11. 10-18. 「仏教学の諸問題」中の西博士論文指摘の箇所。

以上大智度論卷三十二から引用した箇所は科段の八と対応するものであり、後に科段八の文を掲げ比較の便に供することとする。またこの引用文は四Cの「答えの一・二」を解釈する上で役立つ。四C答えの二にあらわれる所の、諸法実相を涅槃の相に譬える箇所と対応するものを有し、それを詳しく解して居る。ところで、この諸法実相は右卷三十二からの引用文中では、これを「知り」「證」しても「仏道を成ずるを妨げ」、菩薩は大悲と精進の力によって「還りて諸行を修す」といわれている。諸法実相を知り證した後でも仏道を実成するという最高の所まではいかずに(菩薩に)「還りて諸行を修す」という。したがって、卷三十二での引用の箇所からすれば、諸法実相の知・證から「還りて諸行を修す」に至るまで時間の経過を認めていると思われる。したがって実践的現実にみれば有為と無為とが同一人の上において同時にあらわれているのではない。人の一切の観法が滅した諸法実相の境地自体では無一・無二で、諸法実相という法も精進という法も対立して存在するのではなく、この無念無想の状態に於ては、両つながら法は心中に浮かんでいないのではあるが。

四C (op. cit. p. 175a, 1. 6-p. 177c, 1. 10)

三界五道の衆生の様子を見、あわれんで大精進を勸めて実智慧を得諸法の実相を知り、余の波羅蜜を以て助成して以て衆生を益すとか、(op. cit. p. 175, b. 1. -1292-c, 1. 4)

「菩薩は此れを見て、是の如く思惟す。『此の苦業の因縁は、皆これ無明、諸の煩惱の作す所なり。我當に精進して

六度を勲修し、諸の功徳を集めて、衆生の五道の中の苦を断除すべし』と。大。哀。を。興。勃。し。精。進。を。増。益。す。』とのべ、大悲心や大哀をおこして精進を発し増加する理由をのべている。(op. cit. p. 177, c, ll. 5-10)

五、菩薩の精進波羅蜜と他の波羅蜜夫々とを重ね修すること。(大正二十五p. 177, c, l. 10-p. 178, a, l. 3)

六、身心精進不懈怠〈cf. "kayikacaitasikaviryāraṃsanato... Pañcaviṃśatisāhasrikā prajñāpāramitā ed. by N. Dutt p. 26, ll. 8f. 「身心精進不懈怠故」摩訶般若波羅蜜多經卷第一、大正八p. 220a, ll. -3f.〉に対する釈(大正二十五p. 178a, l. 3-p. 179c, l. -3)

七、復次菩薩精進。遍行^二五波羅蜜^一。是為^二精進波羅蜜^一。(大正二十五p. 179b, l. 9~c, l. -3)

八、次に、大智度論精進關係記述(卷十五・十六)の最末尾。本論のはじめに紹介した虚誑の精進から寂滅(真実の境地)へ、さらに真実の精進へと推移する様子を扱った箇所。(op. cit. p. 179c, l. -3~p. 180b, l. 7). 本論末に原漢訳文を科段にわけて載せる。

さて、精進viryaは、行為のもののようなものであるとしてみる(一般的)見解を大智度論が紹介している。(三A参照。科段で二の中の大正二十五p. 173a, ll. 11-17も参照)。しかし「一切の有為は皆これ虚誑」であるにおわる以下の批判は、このような一般的viryaから起こる行為に向けられるものである。(a)

(この箇所は四C「答その二」についての智度論卷第三十二からの引用参照)

心の分別が止み、精進がもとである行為も無くなる。唯寂滅を以て安穩と為すという所に入る。(b)

その時に本願をおもいおこし衆生を隣愍するので「還りて菩薩の法を行じ諸の功徳を集む」と行為が再現する。(c)

(瑩山禅師の二願「生生世世 化度利生」と「女流濟度」が発願文で見られる。孤峰智璨編「常濟大師全集」昭和42年総持寺再刊p. 79f.)

ついで(c)に対する詳説が行われ、(c)にあることは精進波羅蜜であることがわかる。これで(a)の劈頭の「復次菩薩行
精進波羅蜜」の説明は一通り行なわれた。(c)

「如佛所説」以下は以上に対する教證である。(d)

「所以者何」以下は(d)の説明になっている。(d)

(1) そこでは一切精進は皆是邪偽なるを知る故に。「(したがって)一切作法皆是虚妄不實にして、夢の如く幻の如
し」といわれ精進と作との関係も示されている。

(2) どういう見地からすれば(1)のようにいわれるのかが示される。即ち、「諸法平等なるは是れを眞実となす。平等
法に中^{あた}つては、求索する所有るべからず。是の故に一切精進皆是虚妄と知る。」

(3) (2)で示される見地からさらに進んで、精進が行じられることが示される。これが菩薩の眞実の精進と名づけられ
るものである。

(d)の中の(1)と(3)は、(a)と(c)に夫々対応している。(d)は書き下し文で本論の頭初の方で紹介した。

以上、特に精進と作との関係という観点から資料を簡んで紹介した。

(a) 復次菩薩行精進波羅蜜。於一切法不生不滅非常非無常非苦非樂非空非實非我非無我非一非異非有非無。尽知一
切諸法因縁和合。但有名字実相不可得。菩薩作如^レ是觀^レ知一切有為皆是虚誑。

(b) 心息無為。欲滅其心唯以寂滅為安穩。

(c)

爾時念_二本願_一隣_レ愍衆生_一故。還行_三菩薩法_一集_三諸功德_一。

(c)

菩薩自念我雖_レ知_三諸法虛誑_一。衆生不_レ知_二是事_一。於_二五道中_一受_三諸苦痛_一。我今當_三具足行_二六波羅蜜_一。菩薩報得神通。亦得_二仏道三十二相八十種好_一。一切智慧大慈大悲無礙解脫。十力四無所畏十八不共法三達等無量諸仏法_一。得_二是法_一時一切衆生皆得_二信淨_一。皆能受行愛_レ樂_二仏法_一能弁_二是事_一。皆是精進波羅蜜力。是為_二精進波羅蜜_一。

(d)

如_二仏所説_一爾時菩薩精進不_レ見_レ身不_レ見_レ心。身無_三所作_一心無_三所念_一。心身一等而無分別。所求_二仏道_一以度_二衆生_一。不_レ見_下衆生為_二此岸_一。仏道為_中彼岸_上。一切身心所作放捨。如_三夢所_レ為_二覺無_三所作_一。是名_二寂滅_一。諸精進故名為_二波羅蜜_一。

(d)

(1) 所以者何。知_二一切精進皆是邪偽_一故。以_二一切作法皆是虛妄不実_一。如_レ夢如_レ幻。

(2) 諸法平等是為_二真実_一。平等法中不_レ応_レ有_レ所_二求索_一。是故知_二一切精進皆是虛妄_一。

(3) 雖_レ知_二精進虛妄_一而常成就不_レ退。是名_二菩薩真実精進_一。

(a)(b)(c)(c')(d)(d')(1)(2)(3) op. cit. p. 179c—p. 180a. 以下に教証がいろいろある。

(d)(1) は十諭の中の_二を_一含むもので、次の(e)はスッタニパータ中の padhanasutta での記述を思わせるもの_二や_一 Mv. の記述_二を_一思わせるものである。

(e) 如_二佛言_一、我於_二無量劫中_一。頭目髓腦以施_二衆生_一令_二其願滿_一。持戒忍辱禪定時。在_二山林中_一身體乾枯。或持齋

節食。或絶_二諸色味_一或忍_二罵辱刀杖之患_一。是故身體焦枯。又常坐禪曝露勤苦以求_二智慧_一。誦讀思惟問難講説。

一切諸法以_レ智分_二別好惡麁細虛實多少_一。供_二養無量諸佛_一。慇懃精進求_二此功德_一。欲_レ具_二足五波羅蜜_一、我是時。無_二所得_一。不_レ得_二檀尸羅精進禪智慧波羅蜜_一。見_二然證佛_一以_二五華_一散_レ佛。布_二髮泥中_一。得_二無生法忍_一。即時六波羅蜜滿。於_二空中_一立。偈讚_二然燈佛_一見_二十方無量諸佛_一。是時得_二實精進身_一。精進平等故得_二心平等_一。心平等故得_二一切諸法平等_一。如_レ是種種因緣相。名爲_二精進波羅蜜_一。

註

* 摩訶般若波羅蜜經卷第一・序品第一、大正八・p.217a

* 中田直道「Suttanipāta padhānasutta に於ける padhāna について」印度学仏教学研究第43巻2号1995年刊。

Sn. 中の padhāna の同義語としての virya を紹介している。

*** Mv. 中の燃燈仏の物語については、香川孝雄教授「本願思想の源流」(「日本佛教学会年報—佛教における誓願」特に pp. 6 & 16 参照。燃燈仏について、羅什訳小品般若経巻二・七(大正八、p. 541c; p. 568c)〔平川彰博士「般若経と六波羅蜜経」印度学仏教学研究第19巻2号昭和46年3月参照〕